

TOKYO ガンダムプロジェクト 2025

東京藝術大学が制作するガンプラ・ランナー・アート

My desk (or your desk)

ガンプラの肖像

ガンプラとは、いったい何だろう。
完成されたモビルスーツの姿なのか、それとも組み立てを楽しむためのキットなのか。
私たちは、ある日ひとつの仮定にたどり着きました。「最もリアルなガンプラは、ランナーである」という考えです。

ガンダムという存在はフィクションであり、完成されたガンプラもその象徴です。しかし、ランナーは実際に存在します。設計図に従って金型から成形され、精密に管理された生産ラインを経て、私たちの手に届く。それは、ガンプラという文化の中で唯一、工業的・物質的なリアリティを帯びた構造体なのです。

この作品では、ランナーを素材としてではなく、主題として扱っています。本来は切り取られ、廃棄されるはずのランナーそのものを加工し、「作る」という行為を前提とした製品のリアルを浮かび上がらせようとしています。ガンプラは、完成させることを目的にしながら、同時に「作っている最中」にこそ最もリアルな時間が宿る存在です。その時間が最も濃密に現れる場所が、制作机——私たちがこの作品で提示している「舞台装置」です。

机の上には完成品はありません。あるのは、加工途中のランナー、工具、削りカス、そして「何かを作っている」手の痕跡。この光景は、誰かの個人的な部屋でありながら、同時に多くの人の記憶と重なり合う普遍的な場でもあります。ここに映し出されるのは、ガンプラという文化に内在する“作ることのリアリティ”そのものです。

私たちはこの机上を、チームによるリサーチと議論の中で見出しました。その中心には、40年近くガンプラ制作を続けてきたメンバーの作業環境があります。しかしそれは「個人の語り」ではなく、ガンプラという文化の象徴的現場として再構成されたものです。当事者としての視点は、私的な物語ではなく、共有可能な制作の感覚としてこの場に組み込まれています。

モニターには、制作中の机上の俯瞰写真が実寸大で映し出されます。最後には画面が真白に変わり、配置されたランナーがライトボックスの上に浮かび上がるように輝きます。完成品が不在であること、制作の途中が可視化されること——その「間（あわい）」の状態こそが、ガンプラの持つ現実性と創造の本質を象徴しています。

この作品は、ある問いを投げかけます。

「なぜ、私たちは作るのか」

その問いにすぐ答えることはできません。けれど、手を動かし、部品を切り出し、ランナーを見つめる時間の中に、確かに「リアル」が存在している。それはガンダムの世界よりも、完成されたガンプラよりも、はるかに生々しく、私たちに近い現実なのかもしれません。

この作品が、あなた自身の「作る」という記憶を静かに呼び起こす契機となれば幸いです。